

ボリス・ブルツクス

——活動と著作の概観——

森 岡 真 史

はじめに

本稿の筆者は、前稿（森岡 1995）において、ミーゼスやヴェーバーと並んで経済計算論争の提起者の一人として知られるロシア＝ユダヤ人、ボリス・ダヴィドヴィチ・ブルツクス（Борис Давидович Бруцкус / Boris Davidovich Brutzkus, 1874-1938）の社会主義・計画経済論の再評価を試みた。その後、ブルツクスに関する情報・資料の収集に取り組む中で、彼の活動と著作は、筆者の当初の予想をこえて、多方面にわたるきわめて豊富な内容を持つことがわかった。本稿では、これらの多面的な業績の総括的な検討・評価に向けた中間作業として、内外の諸研究および筆者自身の調査に基づき、ブルツクスの活動と著作に関する予備的な概観を試みる。また補足資料として、判明している限りでのブルツクスの著作目録を付した。

本論に入る前に、近年のブルツクス研究をめぐる動向について見ておこう。内外のロシア人の間でのブルツクス再評価は、1988年にパリで Д. シュトルマンと В. ソロキンがブルツクスの著者の一つ『社会主義経済』を詳細な解説を付して復刊したことから始まる（#134; Сорокин 1988, Штурман и Сорокин 1988, Штурман 1988。なお#はブルツクスの著作目録中の番号を示す）。1989年には В. К. カガンが、ブルツクスの最後の移住先であるエルサレムに残されたアルヒーフ資料を用いて彼の伝記を刊行した（Каган 1989）。この伝記は、ブルツクスの経歴に関する基本的事実に加えて、彼がソ連での強制的農業集団化や知識人への弾圧を告発して亡命地ドイツで行った抗議行動に関わる多くの資料を含んでいる。この年にはまた、ソ連国内ではじめての復刻として、ハイエクの編集下で1935年に英語で刊行されたブルツクスの論文「ロシアにおける経済計画の帰結」が『経済と工業建設』誌に登場する（#135）。1990年には、『ノーヴィイ・ミール』、『経済の諸問題』、『レニングラード大学紀要』の三誌が同時に『社会主義経済』の主要部分を復刻した（#136, #137, #138）。1992年からは、Н. Л. ロガリナがブルツクスに関する論考を精力的に発表している（Рогалина 1992, 1994, 1995, 1996a, 1996b, 1998）。1994年には、Э. Б. コリツキイ, А. И. ヴァシュコフ, Я. З. ザハロフが「ロシア人亡命者の経済学的遺産」シリーズの第1巻としてブルツクスをとりあげ、ソヴェト経済に関する彼の主要論文数編を復刻した（#140; Корицкий, Васюков и Захаров 1994）。また、同じ年に大学教科書として刊行された『経済学説史』の第2巻（対象は戦間期）では、編集者である А. Г. フドコロモフが、自由主義者を主題とする一章の中でストルーヴェやプロコポーヴィチと並んでブルツクスの名をあげ、その見解を詳しく紹介して

いる（Худокормов 1994）。1995年には、晩年の未発表草稿を含むブルツクスの論文集『ソヴェト・ロシアと社会主義』（#143）がカガンの編集によりペテルブルクで刊行された。亡命ロシア人に対する関心の高まりを背景として1997年に刊行された1900-30年代亡命ロシア人の事典にも、ブルツクスは独立の項目で登場している¹⁾。さらに、O. B. ブドウニツキイが編集した文献資料集『ユダヤ人とロシア革命』（Будницкий 1999）にソヴェト体制下のユダヤ人の状況に関するブルツクスの論文が復刻されたように、ユダヤ人問題でのブルツクスの貢献に対しても注目がよせられつつある。このほか、H. K. フィグロフスカヤ、И. Л. ルンデンらがブルツクスの著作集の刊行を準備中であるが、資金等の事情で現時点では残念ながら実現に至っていないようである²⁾。欧米では、J. H. ヴィルヘルム（Wilhelm 1993）がブルツクスのソヴェト社会主義論を紹介し、その分析の先見性を強調した³⁾。日本ではこれらの動向に先だて、すでに小島（Kojima 1985）が、40点からなるブルツクスの著作目録を発表していることが特筆される。これは、公刊されたブルツクスの著作目録としてはおそらく最初のものであろう（未公刊の目録としては、彼の三男レオニード・エリエゼルが1979年8月に作成したものがある）。小島（1987）は、ブルツクスをその一人とする革命前後のロシア農業経済学者群像を描いている。小島（1996）は、ブルツクスの生涯の簡潔な紹介と増補された著作目録であり、小島（1997）は自由主義経済思想の比較研究という視点からのブルツクスの貢献についての本格的考察である。

I 革命以前の活動——ユダヤ人植民協会から農業経済学へ

ブルツクスは1874年10月15日に、当時ロシア帝国領であったリトアニアの都市パラングでユダヤ人の琥珀業者の家庭に生まれた。一家は1878年に父親がモスクワで皮革工場を開くのに伴ってモスクワに移るが、1891年のモスクワからのユダヤ人手工業者の追放によりワルシャワに逃れた。同年ワルシャワ大学医学部に入学したブルツクスは、そこでイディッシュ語での出版活動を行うサークルに参加する。彼は10歳までユダヤ人としての家庭教育を受け、ギムナジウムでの被差別体験や1881年のポグロムなどを通じて、ユダヤ人としての自己意識を強く抱くようになっていたのである。サークルではブルツクスは後にブントやシオニスト運動の指導者となる人々と親しく交わったが、しかし思想的にはマルクス主義と急進的シオニズムの双方から距離を保った。ロシア＝ユダヤ人の経済問題により深い関心を抱くようになったブルツクスは、1894年に家族の反対を押し切って医学部を中退して改めてノヴォ・アレクサンドル農林大学に入り直し、そこで農学・統計学・化学・土壌学・生理学などを幅広く学ぶ（以上はКаган 1989, c. 9-13）。同大学で彼が師事した農業経済学の教授 A. И. スクヴォルツォフ（1848-1914）は、蒸気機関がロシア農業にもたらす変化を論じた著作により П. Б. ストルーヴェに強い影響を与えた学者であり、また A. Н. チェリンチェフの師でもある（Pipes 1970, pp. 60-62; 小島 1987, p. 176）。

1898年、ブルツクスは農林大学を優秀な成績で卒業して農学者（агроном）の資格を取得した後、ペテルブルクのユダヤ人植民協会（ЭКО）の農業部に就職した（Каган 1989, c. 14）。ユダヤ人植民協会とは、1891年にバイエルンのユダヤ人富豪ヒルシュ男爵により、政治的・経済的差別下にあるロシア＝ユダヤ人の世界各地への植民を支援することを目的として設立された国際組織

である（Norman 1985）。ヒルシュが没した1896年以降は、同協会はロシア帝国内での植民やユダヤ人の全般的な経済的・文化的条件の改善に支援の重点を移しており、ブルツクスは国内各地のユダヤ人入植地の現地調査と農事指導を通じて、これらの活動に精力的に取り組んだ。私生活の面では、ブルツクスは1902年にシオニストの友人の妹で歯科医のエミリヤ・ザイデマンと結婚し、1910年までに3人の子をもうけた（Каган 1989, c. 18）。

ベン・ヴィットの筆名で1899年に執筆した小冊子『ユダヤ人植民の方法』（#2）において、ブルツクスは既存の様々なユダヤ人植民支援組織がこれまで推進してきた植民事業の多くが失敗に終わった原因を考察している。彼の見るところでは、失敗の最大の原因は、植民支援組織の入植者に対する過度の温情主義にある。すなわち、入植者はあらかじめ組織の資金によって耕地・果樹園・菜園・農具・小屋・住宅から医者⁴⁾の常駐までを保証され、また入植後の様々な不都合に対しても組織の援助をあてにできるために、入植地での自立的経営を可能にするだけの農場の収益性を確保しようと努力する動機が弱まり、依存的・浪費的体質に陥りやすい。ユダヤ人の植民の支援は、慈善ではなく入植者の自立を支援する事業として行う必要があり、そのためには、植民組織は入植先で労働者に（季節的ではなく）恒常的な賃労働の機会を保証する資本主義的農場を組織し、入植者には一農場労働者として出発するのに必要な資金のみを貸し付けるべきである。賃金労働者として出発した人々が貯蓄の蓄積に励めば、そこではじめて、入植地に自立したユダヤ人農家が成長する余地⁵⁾が生まれる。シオニスト運動がユダヤ人自営農の創出という願望のみにとらわれていることを批判して、ブルツクスはこう述べている。

社会活動においては『望ましさ』という一つの基準だけを指針とすることはできず、『実行可能性』という基準を忘れてはならない。実行不可能な課題を提起するならば、われわれは結局、何事も成し遂げられないであろう。（#2, c. 29）

以上のブルツクスの議論には、温情主義批判、経済的自立の重視、自立促進的な支援政策の提案、事態への現実主義的接近、等々の面で、その後の著作を貫く彼の思考の基本的輪郭がすでにきわめて明確な形で現れている。

ブルツクスは農業の技術的・経営的指導に深く関与し、その実績から、1903年にはブロックハウス-エフロン版『百科事典』の項目「農業学校」の執筆者に選ばれている（#3）。慈善的支援政策を継続するユダヤ人植民協会本部との対立が深まったため、ブルツクスは1907年に同協会を退職してペテルブルク農業大学の講師に転じた（Каган 1989, c. 15）。しかし在職時代に自らも参加して行ったユダヤ人の経済状態に関する大規模かつ詳細な現地調査の統計的分析には引き続き参加し、その結果を1908～13年に、『ロシア・ユダヤ人の職業構成』（#6）、『ユダヤ人農業植民地』（#10）、『ユダヤ人住民の統計』（#11）、『エカチェリノスラフ県におけるユダヤ人農業移民』（#18）、ブロックハウス-エフロン版『新百科辞典』の項目「ユダヤ人：統計的・経済的概観」（#25）などにまとめた。同じ時期、ブルツクスはユダヤ人農業・手工業振興協会（OPT）の再建に参加し、会費の引き下げ等による協会の民主化と会員拡大にも取り組んでいる（Gassenschmidt 1995, p. 60）。これら一連の活動や著作を通じ、ブルツクスはロシアにおける自由主義的ユダヤ人運動の代表者の一人とみなされるようになった⁶⁾。

ユダヤ人問題だけにとどまらない、より包括的な民族問題についてのブルツクスの見解は、ストルーヴェが編集する雑誌『ロシア思想』に1910年に寄稿した論文「民族と国家」（#13）に述

べられている。ブルツクスは、一民族一国家という「国民（民族）国家」の構想や、これを前提として少数民族の支配民族への同化を人為的に促進する政策には、同化の形態が暴力的であると平和的であるとを問わず、一貫して強く反対した。彼の議論は、文化的単位である「民族」（национальность——今日的に言えばエスニシティか）と政治的単位としての「ネーション」（нация）の区別に基づいている。ブルツクスは、言語・出版活動をはじめとする民族文化の振興を各民族の不可侵の権利として擁護する一方、各民族が独立国家を形成する権利については、これを絶対視しなかった。国家が民主主義的に組織され、少数民族に平等な市民的権利と文化的自主性が保証されるならば、分離独立は、支配的民族と少数民族双方の利益を損なうと考えたからである。このような認識の背景には、凝集した居住地域を持たず各地に散在するというユダヤ人に特徴的な（しかし程度の差はあれ、他の多くの民族にも共通する）事情がある。一民族一国家が原則とされる限り、ユダヤ人もまた、民族としての独立を保つためには特定の領域で国家を建設しなければならない。しかしこれは必ず他の民族との敵対や紛争を引き起こす。ブルツクスは、自由で民主主義的な多民族国家という原則に、ユダヤ人が平和的に文化的独立性を維持するための唯一の活路を求めたのであろう。

さて、農業大学に移ったブルツクスは、そこで農業経済学、ロシア農業論の本格的な研究を始めた⁷⁾。この分野ではブルツクスはストルーヴェとスクヴォルツォフから重要な影響を受けている。19世紀末から革命期にかけてのロシアの言論界では、農業問題解決の鍵を農民への地主地の追加的再配分に求める考え方が支配的であった。しかしストルーヴェは、『ロシア経済発展の問題に関する批判的覚書』（1894年）においてこの通説を退け、ロシア農業の危機の源泉は、工業・交通の発展が不十分であるために農村から都市への職業移動が停滞しており、農村内部では土地割替共同体が過剰人口滞留の温床となっていることにあると主張した（Pipes 1970, ch. 5）。同じ時期、ブルツクスの師スクヴォルツォフもまた、ストルーヴェに近い見解を抱きつつあった⁸⁾。1925年にプラハで刊行されたストルーヴェ記念論文集に寄稿したブルツクス自身の言葉では、農村における問題は「土地不足」ではなく過剰人口であるという見解を彼が受け入れたのは、1908年に行われたストルーヴェとの文通の結果である（#57, c. 63-64）。ブルツクスは農村の分解と一部農民の離農・賃労働者化を、それが工業の成長に伴う分業の拡大を背景として進行し、農村における自立した勤労農民経営の発展をもたらす限りにおいて進歩的現象とみなすようになり、この認識に基づいて、1909年に発表した小冊子『ロシアと外国における土地整理』（#9）以降、割替共同体の解体と独立自営農民の創出をはかるストルイピンの農業改革を支持する議論を展開した。小冊子『西欧における小農経営』（#24）その他の著作でロシアおよび他のヨーロッパ諸国の近代農業史に関する比較研究を行ったブルツクスは、政治的収奪によって大土地所有が上から人為的に創出されることがなかった諸国では、民主主義の進展と民衆の文化的向上、耕地散在・定期的割替の克服、社会的ネットワークを通じた農学知識の交流・普及、農業協同組合運動の拡大などを背景に、勤労農民経営は資本主義的大農場に伍して競争上確固たる地歩を築きつつあるという結論に至った。一方、このような勤労農民経営のもつ競争力の基礎を解明するために、ブルツクスは、収穫通減法則と生産集約度（およびそれらの生産・交通手段の進歩による変容）を基本的概念として国民経済における勤労農民経営と資本主義的大農上経営のそれぞれの役割および両者の関係を明らかにする農業経済理論の構築をはかった（#22）。工業と違って規模の優位は農業では

限定的・条件的にしか作用せず、勤労農民経営はその独自の行動様式により競争的な市場関係下でも存続・成長する可能性をもつという考え方は、程度の差はあれ、後に「組織・生産学派」と呼ばれるようになる農業経済学者（チェリンチェフ、A. B. チャヤーノフ、H. II. マカロフら）に共通して見られる⁹⁾。ブルツクスも広い意味では同学派の一人とみなしてよい。ただし、家族労働（また補完的には雇用労働）の適切な利用により多くの所得の獲得をはかろうとする小農の経営者としての動機と能力を強調し、またこうした経営能力の発達を可能にする国民経済全体の枠組みとして、個人の自由な創意と責任を基本原則とする資本主義市場経済を支持する立場を明確にしたことは、同学派の他の論者には見られないブルツクスの特徴であろう。ブルツクスは1913年から『農学雑誌』の編集委員を勤め（Каган 1989, c. 18）、第一次大戦直前の時期には、農業経済学者としても著名な存在となっていた。

以上に見たブルツクスの革命前の活動を要約するならば、ユダヤ人運動やロシア農業の研究を通じて彼が求めたのは、政治的には、諸民族の平等な権利と文化的自治に立脚する民主主義国家の樹立であり、経済的には、工業の発展に伴う市場の拡大と新たな産業部門・職業の叢生を前提とする、農村から都市への人口移動および農村内における経営者能力に富んだ勤労農民集団の成長であった。後者に関して彼は、未来の民主主義国家が、経済構造の変化に伴う苦痛や犠牲が勤労大衆にとってできるだけ小さいものとなるよう、適切な社会政策をとることを期待していた。なお、ブルツクスは、社会主義右派と自由主義左派の連合組織として1915年から1917年にかけて活動した「ロシア急進民主党」に短期間所属したとされるが、関与の詳細は明らかではない¹⁰⁾。これを例外とすれば、ブルツクスは種々の社会的活動に参加しつつも、政治的には常に非党派的な立場をとり続けた。

II 革命と内戦の時代——社会主義とマルクス主義の批判

二月革命の勃発からボリシェヴィキの権力奪取までのブルツクスの言論活動の多くは、チャヤーノフらが中心となって設立した農村研究者の超党派の連合組織「農業改革連盟」の大会や出版物で行われている¹¹⁾。ブルツクスは、新政府による農業改革は資本主義市場経済の原則を尊重し、国民経済全体の発展という見地に立つものでなければならないという確信にもとづいて、地主所有地の分割は有償で行うこと（そのために農民への信用供与を強化する）、すぐれた先進的技術を体化している大農場経営や勤労農民の独立経営は分割の対象としないこと、新たな分割のさいにはできるだけ耕地細分を避けるように行うこと、等々の原則を提案した（#28, #29, #33, #35）。二月革命による専制の崩壊を歓迎したものの、革命の急進化や革命諸党に扇動された無政府主義的傾向に懸念を抱いた彼は、「民主主義は破壊力であってはならない」と説き、解き放たれた民衆のエネルギーを健全な経済発展の創造力に転化するよう訴えた（#35, c. 42）。農民の側の主体的な経営努力の問題をぬき、もっぱら土地再配分に関わる政府の布告によって農業問題の「解決」をはかろうとする考え方を戒めて、ブルツクスは次のように述べている

…農業改革の帰結は、最終的には、農民個人の主導的エネルギーの蓄えと、各自の力を協同組合の中で調和させる智恵にかかっている。進歩はいつでも、客観的契機と主観的契機の相互作用の結果である。…

〔上記の原則にもとづく〕土地改革は、社会主義への巨大な一歩となろう——もしこの言葉が、勤労大衆の経済的・社会的・政治的力の増大を意味するのであるならば。（#35, c. 45）

上記の引用が示すように、勤労大衆の全面的向上という意味での「社会主義」には、ブルツクスは少しも反対ではなかった。彼が土地の社会化、さらには市場・資本主義経済の否定に反対したのは、それが国民経済全体の発展を損ない、その結果として勤労大衆自身の状態を悪化させると考えたからにほかならない。しかし彼の説得もむなしく、1917年春からロシア各地で始まった共同体農民による土地奪取運動の波は、地主地・農民地を問わず、ほとんどすべての私有地に及び、翌年春までに先進的な農業経営はすべて解体されてしまった。ソヴェト政府は、国民経済的観点からはきわめて破壊的なこの土地再配分に事後的な承認を与え、さらに武装部隊の派遣による穀物徴発と「富農」に対する弾圧を強行することにより、各地の農村を荒廃させた。

妻エミリヤの残した手記によればポリシェヴィキ権力の特徴である「個人の人格に対する蔑視、自由への完全な無関心、『目的が手段を正当化する』という原理、残忍なテロル、そしてチェーカーは、B〔ブルツクス〕にとって受け入れがたいものであった」（Жаган 1989, c. 20）。経済的な混乱と瓦解、チェーカー（秘密警察）によるテロル、飢え・寒さ・伝染病の脅威のもとで、十月後のペトログラードでの一家の生活は困難をきわめたが、ブルツクスは研究・執筆活動を続けた。¹²⁾内戦が最高潮に達していた1919年に刊行された小冊子『パレスチナにおけるユダヤ人民族センター』（#40）では、ブルツクスはパレスチナにおけるユダヤ人入植地の経済的展望について実証的に考察しつつ、シオニスト指導者の間での現地のアラブ人への無関心を批判し、ユダヤ人とアラブ人との深刻な敵対を避けるためには、ユダヤ人側はアラブ人からの土地の購入に際して慎重を期すべきであると主張した。パレスチナにおけるユダヤ人の指導的役割は現地のアラブ人と平和的に共存し、中東における民族意識の覚醒を積極的に支援することによってこそ確保されるはずである。こうした考えを普及するため、彼はペトログラードの「ユダヤ人大学」で講義を行い、ユダヤ人の新聞・雑誌にも寄稿している。ロシア国内で商工業・金融業への抑圧がユダヤ人の生活領域を狭めつつあるときだけに、ブルツクスは、植民問題への正しい接近はユダヤ人にとって死活の意義をもつ問題であると考えたのである。

内戦時代を辛うじて生き延びたブルツクスは、1920年8月、ペトログラードの「疲れ切りやせ衰えた」知識人の集会で、「社会主義体制下の国民経済の諸問題」という2時間半にわたる報告を行う。そこで彼は、「マルクスの社会主義の経済問題は解決不可能であり、わが国の社会主義の崩壊は避けられない」と主張した（#135, c. 13）。これは、その後のブルツクスの研究生活の新たな主題となる、社会主義経済の一般の問題についての最初の発言である。ブルツクスの見解は、ソヴェト政府だけでなく、革命後の混乱や崩壊の原因をマルクス主義それ自体ではなくポリシェヴィキの誤謬に求めていた多くの左派知識人に対する挑戦であった。言い換えれば、ブルツクスは、「われわれならポリシェヴィキのような失敗はしない」と考えているすべての社会主義者・マルクス主義者の批判を試みたのである。ネップへの政策転換が始まり、私的な出版活動の可能性が生まれると、ブルツクスは1921年末に同僚の経済学者や技師を誘い、ロシア技術協会第11部（産業経済部）の機関紙として月刊誌『エコノミスト』（Экономист）¹³⁾を創刊した。報告に基づく同名の論文「社会主義体制下の国民経済の諸問題」は、ほとんど修正を求められることなく検閲を通過し、1922年3月までに、この雑誌の第1号から第3号に掲載された（#44；#135、

c. 14)。

ブルツクスが上記の報告を行った1920年は、ミーゼスが論文「社会主義共同体における経済計算」を発表し (Mises 1935[1920])、大規模な社会的分業のもとでは、市場価格の計算機能や私的所有の誘因機能を欠いた経済は効率的に機能しえないという命題を提起した年である。互いにまったく独立に構想されたにもかかわらず (当時のロシアは、西欧諸国の学術文献にアクセスできる状況になかった)、ブルツクスとミーゼスは、情報伝達、経済的責任、技術革新の動機、自由の保障等々の面でのマルクスの社会主義構想の内在的難点を明らかにする点で、きわめて共通するところの多い議論を展開している¹⁴⁾。ただし、ブルツクスとミーゼスには一つの大きな違いがある。ミーゼスが、特に1922年の大著『社会主義』(Mises 1980[1922])において計画経済だけでなく、私的決定へのあらゆる規制や介入を拒否する徹底した自由放任主義を唱えたのに対して、ブルツクスは、ブルジョア的自由の形式性を指摘するマルクス主義者の批判に部分的真理を認め、経済的弱者の地位を強めることを目的とした社会政策の役割を積極的に肯定した。

1922年前半には、ブルツクスはソヴェト政権の農業政策についても公の場で発言している。2月末から3月はじめにかけて農業人民委員部の招集によりモスクワで開かれた第3回全ロシア農学者大会¹⁵⁾で報告に立ったブルツクスは、大飢饉 (数百万人の死者を出したと言われる) に至る農業の悲惨な崩壊を引き起こした最大の原因を、第一次大戦や内戦ではなく、土地割替が引き起こした先進的・市場指向的経営の破壊と、その結果として生じた農民経営の下方への平準化および都市・外国市場との結びつきの切断に求めた (#45)。経済復興のためには雇用労働の拡大や、農民の一部の離農や賃労働者化を恐れることなく農村と外部市場との経済的関係を回復・強化することが必要であり、そのためには私的資本に広い範囲で活動の自由を認め、その権利を法律によって正当に保障しなければならない——ブルツクスは農業人民委員部を代表して参加したオシンスキイを前に、このように説いた。また、農業人民委員部刊行の雑誌『農林通報』の7-8月号には、土地不足ではなく、国民経済の発展の遅れによる分業の未成熟と、土地割替制度による農村人口の過剰こそが農業危機の原因であると主張するブルツクスの論文が掲載された (#46)。ブルツクス論文の直後には、後にソヴェト農業経済学の権威となる C. M. ドゥブロフスキイによる、「私的所有のフェチシズム」と題された激しい批判論文 (Дубровский 1922) が続いてはいたが、暴力ではなく言論による争いはブルツクスの歓迎するところであったに違いない。なお、ブルツクスはこの年、革命前の数年間の農業政策に関する論考を集めた著作『農業問題と農業政策』 (#43) を刊行し、また1921年にはペトログラード農業大学の学部長に就任している (Каган 1989, c. 22)。

しかし1922年にはすでに各方面で政治的弾圧が徹底・強化されつつあった。6月には文献・出版総管理局の下にあらゆる出版活動に対する包括的な検閲を行う体制が確立し、『エコノミスト』も、4-5合併号の発行をもって停刊を命じられる。4月から8月には、ロシア正教会の聖職者・信者とエスエル党指導者に対する大規模な見せ物裁判が開催され、多くの人々が死刑判決を受ける (Pipes 1994, chs. 7-8)。このような弾圧措置の一環として、ソヴェト政府は体制に批判的な知識人の大量追放を計画した。教会やエスエルの場合と同様、この追放も、レーニンの直接の指導と関与のもとで準備されたものである。レーニンはまず5月19日にヂェルジンスキイ宛の手紙で、「反革命を援助している作家や教授たちを外国に追放する問題」を「細心に準備」する

よう指示を与える。特に、『エコノミスト』については「明白な白衛派の中心」であり、その寄稿者は「ほとんど全部が国外追放のもっとも正当な候補者」と断じた（邦訳『全集』45巻，pp. 721-722）。レーニンは5月末に発作で倒れるが、復帰するや否や、直ちにこの追放問題を再び提起した。7月16日付のスターリンへの手紙でレーニンは、国外追放の対象として、多数のグループ・個人の名前と並んで『エコノミスト』誌のスタッフの全員」をあげ、ゲーペーウー（チェーカーの後身）に対し、「容赦なく外国へ追放すべき数百人のこうした紳士たちのリストを提出」し、「長きにわたってロシアを浄化する」ために「理由を述べずに数百人を逮捕」することを命じた（Ленин 1999, c. 544-545）。ゲーペーウーが作成した「浄化」すべき知識人のリストには、ブルツクスら『エコノミスト』の編集者・寄稿者6名の他に、С. Л. フランク、Н. А. ベルヂャーエフ、А. С. イズゴエフ、С. Н. ブルガコフなど、全部で120人もの名前が並んでいる（Ленин 1999, c. 550-557）。8月初めのロシア共産党第12回協議会では、知識人問題について報告したジノヴィエフが『エコノミスト』を敵視し、ブルツクスに対する名指しの批判を行った（Широкоград 1990, c. 49）。ソヴェト政府は8月10日に国外および国内への追放刑を行政的に（すなわち裁判などの手続きをぬき）課す権限をゲーペーウーに与える決定を採択し、完全に準備を整えたうえで、8月16日から18日にかけて、両首都およびキエフで知識人の一斉逮捕を実行する（Liggett 1981, p. 347; Латышев 1996, c. 222）。ブルツクスは8月17日に逮捕され、ゲーペーウーの監獄に拘留された後、11月に家族と共にモスクワを出発してドイツに向かう船に乗り込んだ（Каган 1989, c. 22）。出国に際しては、携帯できる衣服や書物に厳しい制限が課せられたという（Латышев 1996, c. 222）。かくして、ブルツクスは、祖国を追われ、亡命者とならざるをえなかった。

III ベルリンでの亡命生活

ドイツに移ったブルツクスは、1923年、亡命ロシア人がドイツ政府の協力を得てベルリンに設立したロシア学術研究所の教授に就任する（Каган 1989, c. 23）。ここでブルツクスは、まず2つの重要な著書を刊行した。一つは『社会主義経済——ロシアの試みについての理論的考察』（#48）で、これは1922年の『エコノミスト』誌の論文を一冊の本にまとめたものである。新たに付した序文で、ブルツクスは、同書が明らかにしている社会主義経済の内的欠陥は、「社会主義について語ろうとするのではなく、それを建設しようとするすべての人々の前に立ちはだかっている。…解答は共産主義者のところに存在しないのと同様に、穏健な社会主義者のもとにも存在しない」と指摘し、社会主義への幻想を抱き続ける亡命知識人たちに、もし祖国に戻る機会が開かれたならば「自分のイデオロギーを根本的に修正し…開かれた目で現実を見つめ、その歴史的時代の具体的要請に応じる」よう呼びかけた。また西欧諸国の社会民主党に対しては、マルクス主義の残滓を払拭して、「個人的所有と個人的創意の制度は、改革することはできても破壊してはならない」ことを大衆に明言し、「革命の党から、勤労大衆の現実の明確な利益に基づく社会改革の党に変わる」よう求めた（#134, c. 16-17）。Ю. Н. Эмелянов（Емельянов 1998, c. 67）によれば、これらの主張をめぐって1923年末から1924年にかけて、亡命ロシア人の出版物を舞台として、ブルツクスと、エスエル右派のМ. В. Вайсуньярк、エヌエス（人民社会主義者党）

の A. B. ペシェホーフ、C. II. メリグノフとの間に激しい論争が行われたという。

ブルツクスが1923年に刊行したもう一つの著書は、やはり亡命前に準備された『農業経済学——国民経済的基礎』（#47）である。同書は農業経済学の方法、農業の定義から出発して農業協同組合論に至る、ブルツクス自身の農業経済学理論の体系を提示した意欲的著作である。序論で農業経済学では原論に比して帰納的・実証的研究の意義がきわめて大きいことを強調した上で、農業の歴史、農業生産の本質とその技術的特徴を概観し、さらに収穫逓減法則と限界原理に基づく地代理論を説き、交通条件の変化が農業組織に与える影響に及ぶ。なお、より普遍的な経済理論の枠組としてブルツクスが準拠しているのは、マーシャルの『経済学原理』である（c. 84）¹⁶⁾。種々の農産物市場の分析に続く後半の諸章では、資本主義的大経営と勤労農民経営という二種の経営様式の補完的および競争の関係、工業の発展と結びついた農村分解の進歩的・分業促進的意義、小農の経済的地位を高める上での信用・機械利用・保険・販売その他の協同組合の役割について、それまで様々な場で部分的に提示されてきた彼の議論が系統的に展開されている。ブルツクス本人の国外追放にもかかわらず、同書は1924年にはペトログラードでも刊行され（#56）、1928年に反革命的文献として禁止・回収されるまで、農業経済学の基本テキストとして広く利用された（Каган 1989, c. 20）。

ロシア学術研究所で研究・教育に従事する傍ら、ブルツクスは同研究所その他の機関で、様々なテーマについて公開講義を行った。C. A. アレクサンドロフが編集したロシアの亡命知識人の講義年譜（Александров 1998）には、ブルツクスが1923年3月から1929年5月まで16回に渡って行った公開講義の日時・場所・主題のリストが提示されている。1924年の論文「ロシア農業革命」（#54）を皮切りに、ドイツ語での論文の発表を開始したブルツクスは、1925年には、18世紀から革命を経てネップに至るロシア農業史を主題とする『ロシアにおける農業発展と農業革命』（#58）を発表する。同書に序文をよせたドイツ農業経済学の大御所 M. ゼーリングは、ロシアにおける革命とそれ以前の農業・国民経済・政治における発展とのつながりをはじめて科学的に解明した文献として強く推奨した。同書は当時のドイツにおいて、ロシアおよびソヴェトの農業問題に関する基本的文献の一つとなり、ブルツクスはこの分野の専門家としてドイツの学界で確固たる地位を占めるに至った¹⁷⁾。ブルツクスはまた、1928年に『社会主義経済』を自らドイツ語に翻訳して発表し（#63）、ここでも高い評価を得る。このときはじめてブルツクスの議論を知ったミーゼスも（辛口で鳴る彼としては珍しく）これを「ロシアのソヴェト国家の諸問題を原理的に論じた最初の、今のところ唯一の書物」と認めた（Mises 1928, S. 284）。

ブルツクスは、ベルリンへの亡命後もユダヤ人問題への関与を続け、多くの論文を書いている。亡命後のユダヤ人問題に関する彼の代表的著作は、ビシュニャークら亡命ロシア人がパリで刊行していた雑誌『同時代ノート』に1928年に発表した論文「共産主義政権下のユダヤ人住民」（#62）であろう。同論文でブルツクスは、「私的経営とその代表者に対するソヴェト権力の闘争は、かなりの程度において、ユダヤ人住民に対する闘争である」と述べ（#151, c. 294）、私的な商工業への攻撃が強まる中でユダヤ人大衆が経済的基盤を喪失しつつあることを指摘している。さらに彼は、ソ連の支配層におけるユダヤ人比率の相対的な高さは一時的現象であってユダヤ人大衆の状態改善を意味するものではないと強調し、かえってこの状況が非ユダヤ人大衆の間での反ユダヤ主義の温床となる可能性についての危惧を表明した。しかし国際的なユダヤ人組織の中には、

ユダヤ人の解放をうたうソ連政府の公式宣伝を信じるものもあり、ブルツクスはそれらの組織への書簡で、ソ連におけるユダヤ人の実態を正確に認識するよう繰り返し訴えなければならなかった（Каган 1989, c. 25-29）。

巻末の著作リストが示すように、1928年から1934年にかけて、ブルツクスは膨大な数の論文を内外の雑誌に発表している。これは、ロシア学術研究所の薄給を原稿料収入で補う必要に迫られたという事情もあるが（Каган 1989, c. 25）、それ以上に、強制的農業集団化と第一次五カ年計画というソヴェト経済の歴史的転換の解明と批判に彼が自己の全精力を傾けたことを示している。この時期の彼の著作は、重要なものだけを拾っても、1928年の「革命における北ロシア農民」（#64）、1929年の「ロシアの国民経済、その本質と前途」（#73）、1932年の「『五カ年計画』の前途」（#100）、『五カ年計画の遂行』（#102）、『ロシア乾燥地帯における穀物経済』（共著、#103）、「ソヴェト・ロシアにおける農業集団化の諸問題」（#104）、1933年の「ソヴェト計画経済の高揚と崩壊」（#108）、「飢饉と集団化」（#110）、「ロシアの穀物輸出：その経済的・社会的基盤」（#112）、1934年の「ロシアの経済的・社会的発展の特質」（#117）などがある。ブルツクスは、ソヴェト国内に残り、自らの専門知識をロシア経済の復興に役立てるために経済機関に勤務していた多くの農業経済学者の良心と知的誠実性を高く評価していた¹⁸⁾。それだけに、ネップの終焉とともにこれらのかつての同僚たちが完全な沈黙を余儀なくされ、さらには投獄・処刑すらされるに至ったことは、一方ではブルツクスに深い悲しみと怒りをもたらし、他方では彼に次のような、ソヴェト経済研究への特別な使命感を抱かせた。すなわち、

ロシア国民経済の正しい全般的概念を確立し、現実のシステムを正しく評価することは、われわれ外国にいる〔ロシア人〕経済学者に宿命づけられた義務である。共産主義的検閲の万力から自由なわれわれだけが、…外的条件ゆえにロシアにおけるわれわれの同僚には果たしえないこの重要な課題を遂行することができる。（#73, c. 408）

ブルツクスは、強制的集団化の背景と帰結の実証的解明を試みるだけでなく、集団化に反対する知識人に対する弾圧や、集団化に抵抗する農民の大規模な追放・殺戮を国際社会に告発する活動に取り組んだ。1930年にドイツ人権同盟に送った手紙の一つで、彼は集団化の惨状をこう描いている。

昨年の冬、ソヴェト権力は、不当にも富農（搾取者）というレッテルを貼られた富裕な農民や、強制的集団化に反対した農民から、衣服を含むすべての財産を集団農場のために収用し、また一部はただ奪い取りました。厳しいロシアの冬に、これらの人々は軍隊によって家から投げ出され、村から追放されました。地方当局の命令により、数千の「富農」はいかなる裁判手続きもなしに射殺されました。数十万の人々は強制労働のために北方の森林地帯に追放されました。…ステップ地帯と西シベリアへの道は餓死あるいは凍死した人々の死体で覆われています。ヨーロッパの歴史で匹敵するものをほとんど見つけることができないほどの破局です。（Каган 1989, c. 43-44）

ソヴェトにおける無党派知識人への迫害や、強制的集団化に伴う農民への暴力に対して国際的な抗議を行う必要があるというブルツクスの必死の呼びかけはしかし、大きな反響を引き起こすことはなかった。当時、ドイツは何よりもまず世界恐慌とナチズムの台頭という混乱のさなかにあり、さらにまた、五カ年計画の華々しい「成果」に関するソ連政府の宣伝は、ソ連と計画経済に対する幻想を人々の間に生み出しつつあった。このような時期に、ソ連で進行中の悲劇に人々

の関心を向けさせることは、きわめて困難であったにちがいない。それでも、ソ連政府が1930年9月に食糧活動妨害の罪により知識人・技師ら48名を処刑したと公式発表を行った際には、ブルツクスはゼーリングとともに起草した抗議声明に、L. v. ボルトケヴィチ、A. ヴェーバー、M. プランク他80名以上の著名な知識人の賛同署名を得ることに成功した。¹⁹⁾

1935年には、ブルツクスの唯一の英語での著書『ソヴェト・ロシアにおける経済計画』（#125）がロンドンで刊行される。同書の出版は、ハイエクが経済計算論争に関わるリーディングスとして企画したもので、ハイエク自身とミーゼス、パローネその他の論文を収めた『集産主義経済計画』（Hayek 1935b）の姉妹編にあたる。同書には、『社会主義経済』の主要部分と、革命から第二次五カ年計画の開始までのソヴェト経済の発展とその到達点を概観する論文「ロシアにおける経済計画の帰結」（#127）が収録されており、序文をよせたハイエクは、中心的な問題を把握するうえでのブルツクスの「並外れた明晰さ」や「卓越した予見」を讃えている（Hayek 1935a, p. x）。集団化と五カ年計画を経て確立したソヴェト経済の基本構造および機能様式についてのブルツクスの分析には、慢性的な不足現象が品質改善や技術革新に及ぼす著しい否定的影響の指摘など、後にコルナイが「不足の経済学」として体系化する理論につながる先駆的認識が散見される。しかしミーゼス論文を含む論集が顕著な成功を収めたのに対して、ブルツクスの著作の方はさほど大きな注目を得ることはなく、しだいに忘れられていった。²⁰⁾

IV エルサレムでの晩年

ロシア学術研究所は1932年に資金不足により閉鎖され、またナチスの権力奪取によりドイツで自由な研究を続けることはきわめて困難になった。ブルツクスがナチズムの台頭をどのように認識していたかは明らかではないが、資本主義経済に立脚しつつ積極的な社会政策を実施する民主主義国家として期待を寄せていたワイマール共和国の崩壊が彼に大きな衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。ロガリナによれば、研究所の閉鎖後ブルツクスはヨーロッパに残ることを望み、当時ロンドン大学にいたハイエクの推薦状を得てバーミンガム大学にアプライしたが、受け入れを拒否されたという。²¹⁾ 結局ブルツクスは、1935年にエルサレムに移り、ヘブライ大学で農業経済学の講義を行うことになった（Kagan 1989, c. 35）。

ロシアの新聞・雑誌その他の資料の入手がきわめて困難なエルサレムでは、もはやソヴェトの現実を詳細に追跡することは不可能であった。しかし理論的問題に関してブルツクスは同地で数編の草稿を執筆した。その一つ「協同組合理論によせて」（1937年、#142）は、資本主義経済における協同組合の役割についての、勤労者の経済的・社会的地位の維持向上に関わる積極的意義と、国民経済全体では資本主義企業に対して副次的・補完的な存在にとどまらざるをえないという限界との両側面からの総合的な考察である。またやはり1937年に書かれた「ソヴェト・ロシアと社会主義」（#147）は、ブルツクス自身による「社会主義についてのわが考察の要約」として重要であるだけでなく、若干の新しい論点も含んでいる。この論文の結論部分で、ブルツクスは自らの議論が反共産主義勢力としてのファシズムの正当化を意味するものではないことを強調した。ブルツクスによれば、ファシズムとは「（専らというわけではないが）かなりの程度において共

産主義への反動」であり、「無制限の（ドイツの場合には獣欲的ですらある）民族主義」が「単一の党が代表する全体主義的国家というポリシェヴィズムの中心思想」と結合したものであって、私有財産への相対的寛容にもかかわらず、社会主義へと接近する内的傾向がある（#147, c. 222）。この把握に基づき、ブルツクスは以下のように考察を締めくくっている。すなわち、共産主義とファシズムは、互いに争ってはいるが、いずれも現代文明を破滅させかねない脅威であり、これらとの対抗を期待しうるのは、ただ強化された民主主義のみである。

このためには、民主主義は社会主義の幻惑を克服しなければならない。[しかし] われわれはまた、ミゼゼスが説いているような、“laissez faire, laissez passer!” という見解に組みするつもりもない。現代の民主主義は社会主義的であってはならないが、しかし社会的でなければならない。それは人民大衆の利益を擁護しなければならない。… (c. 222)

ミュンヘン会談でヒトラーが政治的勝利を収める直前の1938年9月23日にブルツクスがハイエクに送った手紙は、この頃までに彼がナチズムにいかにか深い危機感を抱くに至っていたかを示している。

われわれは、人間の文化のあらゆる高度な達成を破壊しようと全くあからさまに準備している邪悪な勢力の勝利を目前にしています。…今こそ、人類のエリートは（もちろん純粋に道徳的な観点から）人種主義に公然と反対して立ち上がり、人種主義的評価を持ち込むものは、自分自身を文明世界の外に置くものであると宣言すべき時であると私は確信します。… [ナチスは] ユダヤ人を、全般的に絶滅させるという残虐な意図のもとに、人種として迫害しています。攻撃はユダヤ人で止まることはなく、ヒトラーの行く手にある他の民族（まずチェコ人）は早晩、人種的に劣等であると宣告され、その絶滅が始まるでしょう。（Каган 1989, c. 36-37）

ブルツクスは手紙の末尾で、彼が1930年にゼーリングの協力を得てドイツで行ったように、著名な科学者、作家、芸術家によるナチスへの抗議署名を組織するようハイエクに頼んだが、このときすでにブルツクスは癌に侵されていた。3度にわたる手術も甲斐なく、手紙の執筆から70日余り後の12月6日から7日の夜にかけて、ブルツクスはこの世を去り、64年の波乱に満ちた生涯を終えた（Каган 1989, c. 38）。

おわりに

以上の概観から明らかなように、ブルツクスの活動と業績は、ユダヤ人問題、農学と農業経済学、ロシア農業史、マルクス主義批判、ソヴェト社会主義批判、等々の広い範囲を包括しており、しかもそれぞれの分野において、注目すべき足跡を残している。また、彼の思想には、勤労大衆への献身に第一義的な価値を認めるロシア的なナロードニキ主義の伝統と、個人の尊厳と自立を何よりも尊重する西欧的な自由主義という異質な要素の間の希有な、同時にきわめて興味深い結合が見出される。ブルツクスの貢献に光をあてることは、学説史的な再評価として重要であるだけでなく、資本主義と民主主義、国家と民族といった、われわれが現代なお直面している諸問題を考えるうえでも、少なからぬ意義をもつであろう。とはいえ、ブルツクスの全体像をその多様な広がりとともに再構成することは容易ではなく、さしあたりは、各分野ごとの詳細な検討を進

めていくほかない。特に、ブルツクスの先駆性や独自性についてより正確な評価を行うためには、彼自身の見解の内在的な検討と並んで、同時代の理論・思想状況に即した他の学者の見解との比較や、その後の歴史研究の進展に照らした彼の事実認識の吟味を行う必要がある。これらの課題については、機会を改めて取り組むこととしたい。

注

- 1) *Русское зарубежье. Золотая книга эмиграции. Первая треть XX века*, М.: 1997, с. 109-111. ロシアの事典類にブルツクスの名が登場するのは、恐らく1927年の『ソヴェト大百科事典』初版（第7巻）以来のことであろう。同書におけるブルツクスに関する記述については、森岡（1995, pp. 38-39）を参照。
- 2) 彼女らは1993年に刊行されたコンドラチェフの2巻選集（Кондратьев 1993）の中心的な編集メンバーである。フィグロフスカヤは大学院生時代の1950年代終わりにブルツクスの論文を読んで大いに感銘を受け、1972年に出た『経済学百科事典』に「ブルツクス」という項目を加えるよう提案したが却下され、以後、再評価が行われる時代が来ることを信じて資料の収集に着手したとのことである。
- 3) 経済計算論争再考の文脈では、すでにオーストリア学派の Boettke（1990）がブルツクスに注目している。
- 4) Каган（1989, с. 14）によればブルツクスは1896年からユダヤ人雑誌『ヴェアスホート』への投稿を開始した。それらについては筆者は未見である。
- 5) ただし、1919年の著作（#40）では、ブルツクスは、パレスチナでの植民をもっぱら資本主義的方法によって行うことはイデオロギー的理由により困難であることを認め、自己の見解を部分的に修正している。
- 6) 1907年に発足したユダヤ人学術出版協会の編集による『ユダヤ百科事典』（刊行は1910年頃か）にはブルツクスの名が兄ユーリイとともに記されている（*Еврейская энциклопедия*, СПб., Т. 3, с. 42）。また、以下の4種のユダヤ百科事典にも、「B. D. ブルツクス」の項目が見られる。*Jüdisches Lexikon*, Berlin, 1929, Bd. 1, S. 1189; *Encyclopaedia Judaica*, Berlin, 1929, Bd. 4, S. 1117-1118; *The Universal Jewish Encyclopedia*, New York, 1969, Vol. 2, p. 569; *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1971, Vol. 4, p. 1426.
- 7) 大学の薄給を補うため、ブルツクスは1909年から民間の保険会社に勤め、そこで保険制度の問題についても研究を行った（Каган 1989, с. 17-18）。論文#14は農地保険の考察である。
- 8) ブルツクスは1917年にスクヴォルツォフの追悼論文（#32）を書き、彼の業績の歴史的評価を試みている。
- 9) 「組織・生産学派」についてより詳しくは小島（1987）を参照せよ。ブルツクスは主著『農業経済学』（#47）において、こうした考え方の先駆者として、ドイツの E. ダーヴィット、ロシアの C. H. ブルガコフの名をあげている。
- 10) 同党については、*Политические партии России. Конец XIX - первая треть XX века: Энциклопедия*, М.: 1996, с. 515-516を参照。
- 11) ブルツクスは後に、やはりチャヤーノフが1919年にモスクワのペトロフスキイ農業大学で組織した農業経済学ゼミナール（後の農業経済研究所）にも参加した。農業改革連盟および農業経済研究所については、小島（1987, 第5章）を参照せよ。
- 12) ロガリナがアルヒーフから発見した妻エミリヤの1917-1921年の日記（Бруцкус 1995）は、この時期のブルツクス一家の生活についての貴重な記録である。
- 13) ロシア技術協会については、中島（1999）を、また同産業経済部については、Елисеев（1922）を参照せよ。
- 14) ブルツクスのこの論文についてのより詳しい検討については、森岡（1995）、小島（1997）を参照

せよ。

- 15) 同大会については、Кондратьев (1993, кн. 2, с. 410-411) における注記を参照せよ。
- 16) ブルクスはすでに『社会主義経済』において経済理論の基礎はマルクスではなくジェヴォンズ、メンガー、ワルラスらによって創始された限界学派に求めるべきであると明言している。なお、ロシアでは革命以前から、限界理論を受容する経済学者はきわめて少数派であった。
- 17) 日本でも、例えば小泉信三が1928年に同書を「同種類の著述中確かに最良書の一つに数うべきものである」と述べている (『全集』第4巻, p. 383)。この引用は村岡到氏の御教示による。
- 18) ブルクスはコンドラチエフ、ヴァインシチェイン、チャヤーノフ、マカロフ、オガノフスキイ、グローマン、バザロフ、ギンツブルクらの名をあげている (#127, p. 233)。
- 19) 当初はアインシュタインも名を連ねていたが、ソヴェト側からの働きかけにより署名を撤回した。この抗議声明をめぐる経緯については、Каган (1989) を参照せよ。
- 20) 前者の刊行を機に経済計算論争は再び活発化するが、ブルクスの見解を本格的にとりあげているものは、管見の限りでは、山本 (1939) と Hoff (1948[1938]) のみである。
- 21) これは1996年9月に筆者がロガリナ氏から口頭で得た情報である。

ブルクスの著作目録

1. 本目録は、Kojima (1985)、ブルクスの三男レオニード・エリエゼルが1979年に作成した目録および筆者自身の調査に基づいている。ただし、レオニードの目録にあるイディッシュ語・ヘブライ語の著作23点はここには含まれてない。
 2. 番号に*を付したものは、レオニードの目録その他の文献に登場するが、筆者がまだ直接確認していない著作である。
 3. [#29]等は、この文献が#29と全く同タイトルでの再刊または復刊であることを示す。
- 1898 #1*. “О питательном значении аспарагина”, *Записки ново-александрійского института сельского хозяйства и лесоводства*, Варшава.
- 1899 #2. (Б. Бен-Вид) *О методах еврейской колонизации*, Спб.: А. Е. Ландау, 32 с.
- 1903 #3. “Школы сельскохозяйственные”, *Энциклопедический словарь*, т. 39 А (78), Спб.: Ф. А. Брокгауз и И. А. Эфрон, с. 626-633.
- 1906 #4*. “К вопросу о политической организации русского еврейства”, *Восход* (Спб.), 16 февраля.
- #5*. “Национальный вопрос в России и евреи”, *Восход* (Спб.), 12-20-27 апреля.
- 1908 #6. (сост.) *Профессиональный состав еврейского населения России. По материалам первой всеобщей переписи населения, произведенной 28 января 1897 года*. Еврейское колонизационное общество. Статистико-экономические очерки и исследования, вып. 2, Спб.: Север, 80 с.
- #7*. “Уроки аргентинской колонизации”, *Рассвет* (Спб.), № 43-45.
- 1909 #8. “К критике учений о системах хозяйства”, *Сельское хозяйство и лесоводство*, сентябрь, с. 2-36.
- #9. *Землеустройство и расселение за границей и в России*. Спб.: М. П. Фролов, 33с.
- #10. *Еврейские земледельческие колонии*. Спб., 35с.
- #11. (сост.) *Статистика еврейского населения. Распределение по территории, демографические и культурные признаки еврейского населения по данным переписки 1897г.* Еврейское колонизационное общество. Статистико-экономические очерки и исследования, вып. 3, Спб.: Север, 62с.

- # 12*. “В поисках территории. К вопросу о Киренаике”, *Еврейский мир*, ноябрь-декабрь.
- 1910# 13. “Национальность и государство”, *Русская мысль*, кн. 6, с. 138-167.
- 1912# 14. “Акционерное страхование строений в сельских местностях. Доклад Б. Д. Бруцкуса”, Спб.: Ю. А. Мансфельд, 15с.
- # 15. “Классификации систем хозяйства”, *Полная энциклопедия русского сельского хозяйства и соприкасающихся с ним наук*, Дополнительные том (т. 12), Спб.: А. Ф. Девриен, с. 577-583.
- # 16. “Залог наделных земель в Крестьянском Банке”, *Русская мысль*, кн. 7, с. 4-11.
- # 17. “Предисловие”, Ф. Эрбоэ (Ф. Аергове). *Основы сельскохозяйственной экономики*. Перевод с немецкого, Спб.: А. Ф. Девриен, с. v-vi
- 1913# 18. (сост.) *Еврейские земледельческие поселения екатеринославской губернии*. Спб.: Еврейское колонизационное общество, 96с.
- # 19. “Африканская территория”, *Новый восход* (Спб.), № 33, с. 8-14.
- # 20*. “Кризис территориализма”, *Еврейская нива* (Спб.), май.
- # 21*. “Очерк экономического положения евреев в России”, *Сборник материалов об экономической деятельности евреев*, Спб.
- 1914# 22. “Социально-экономические основы крестьянского хозяйства”, *Агрономический журнал* (Харьков), кн. 1. [# 43に所収]
- # 23. “Воспрещение продажи питей и сельское хозяйство”, *Вестник сельского хозяйства*, № 49, с. 3-5; № 50, с. 5-7.
- # 24. *Очерки крестьянского хозяйства на западе*. Харьковское общество сельского хозяйства, изд. “Агрономического журнала”, Харьков: М. Сергеев и К. Гальченка, 96с.
- # 25. “Евреи. Статистико-экономический очерк”, *Новый энциклопедический словарь*, т. 17, Спб.: Ф. А. Брокгауз и И. А. Эфрон, с. I-X.
- 1915# 26. “Экономическое положение евреев и война”, *Русская мысль*, кн. 4, с. 27-44.
- 1916# 27. “Речь Б. Д. Бруцкуса (Произнесенная на заседании 10 марта 1916)”, 4 с.
- 1917# 28. *К современному положению аграрного вопроса*. Вольное экономическое общество, Петроградский отдел лиги аграрных реформ, аграрные вопросы в России, вып. 1, Пг.: Киришбаум, 32с.
- # 29. *Обобществление земли и аграрная реформа. Лига аграрных реформ*, Сер. С, № 7, М.: Универсальная б-ка, 31с.
- # 30. [# 29]. *Русская мысль*, № 11-12, с. 62-76,
- # 31. “Экономический закон сельского хозяйства”, *Агрономический журнал* (Харьков), вып. 1, с. 37-53; вып. 3-4, с. 41-58.
- # 32. “А. И. Скворцов и аграрный вопрос”, *Агрономический журнал* (Харьков), вып. 5-6, с. 3-18.
- 1918# 33. *Очерк аграрной политики иностранных государств и России*. Вольное экономическое общество, Петроградский отдел лиги аграрных реформ, аграрные вопросы в России, вып. 4, Пг.: В. О. Киришбаум, 71с.
- # 34. [# 31] Харьковское общество сельского хозяйства, изд. “Агрономического журнала”, Харьков: Ренессанс, 54с.
- # 35. “Доклад Б. Д. Бруцкуса”, *Труды II всероссийского съезда Лига Аграрных Реформ*, вып. 1, *Основные идеи решения аграрного вопроса*, М.: с. 31-45.
- # 36*. “Сельское хозяйство палестины и его перспективы”, *Эрец-израэль* (Пг.), № 1-2.

- # 37*. “Еврейское земледельческое население России и колонизация палестины”, *Эрец-израэль* (Пг.), № 4.
- # 38*. “Ахузы и их значение для колонизации палестины”, *Ахуза и ее роль в колонизации палестины*, Пг.: Кадима.
- 1919 # 39. “Сельскохозяйственные перспективы района мурманской железной дороги”, *Вестник сельского хозяйства*, № 31-34, с. 3-10.
- # 40. *Еврейский национальный центр в Палестине. Социально-экономический очерк*. Пг.: Кадима, 61с.
- # 41*. “Движущие силы еврейской колонизации”, *Эрец-израэль* (Пг.), № 9.
- # 42*. “Об основах еврейской земельной политики в Палестине”, *Эрец-израэль* (Пг.), № 10.
- 1922 # 43. *Аграрный вопрос и аграрная политика*. Пг.: Право, 234с.
- # 44. “Проблемы народного хозяйства при социалистическом строе”, *Экономист* (Пг.), № 1, с. 48-65; № 2, с. 163-183; № 3, с. 54-72.
- # 45. “Экономические предпосылки возрождения сельского хозяйства”, *Вестник сельского хозяйства*, № 6-7, с. 22-26.
- # 46. “Аграрное перенаселение и аграрный строй”, *Сельское и лесное хозяйство*, № 7-8, с. 13-40.
- 1923 # 47. *Экономия сельского хозяйства. Народнохозяйственные основы*. Берлин: кооперативная мысль, 360с.
- # 48. *Социалистическое хозяйство. Теоретические мысли по поводу русского опыта*. Берлин: Tritemis, 71с. [# 44に序文と結語を付加したもの]
- # 49. “Новый строй земельных отношений в России (по земельному кодексу Р. С. Ф. С. Р.)”, *Крестьянская Россия* (Прага), кн. 4, с. 125-129.
- # 50. “Об эволюции земельной политики советской власти”, *Экономический вестник* (Берлин), кн. 1, 1923, с. 27-43.
- # 51. “Отзывы о книгах. O. Lehnich: Währung und Wirtschaft in Polen, Litauen, Lettland und Estland. Mit Kursübersichten und zwei grafischen Darstellungen, Berlin, 1923.”, *Крестьянская Россия* (Прага), кн. 5-6, с. 230-233.
- 1924 # 52. “Развитие земельных отношений в Польше”, *Крестьянская Россия* (Прага), кн. 7, с. 185-196.
- # 53. “Аграрная революция в черноземном уезде”, *Экономический вестник* (Берлин), кн. 3 (1), с. 152-165.
- # 54. “Die russische Agrarrevolution”, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 78. Jahrgang, S. 301-345.
- # 55*. “Die sozial-ökonomische Lage der Juden in Rußland von 1905 bis jetzt,” *Zeitschrift für Demographie und Statistik der Juden*, Nr. 1, S. 4-10; Nr. 2, S. 42-51; Nr. 3, S. 83-85.
- # 56. [# 47の短縮版]. Пг.: Кооперация, 248с.
- 1925 # 57. “О природе русского аграрного кризиса,” *Сборник статей посвященных Петру Вернгардовичу Струве ко дню тридцатипятилетия его научно-публицистической деятельности*, Прага: Legiografie, с. 59-70.
- # 58. *Agrarentwicklung und Agrarrevolution in Rußland*. Osteuropa-Institut in Breslau, Quellen und Studien: Abteilung Wirtschaft, N. F. Heft 2. Mit einem Vorwort von M. Sering. Berlin: Verlag Hermann Sack, 243S.
- 1926 # 59. “Die Agrargesetzgebung der Sowjetregierung”, *Archiv für Rechts und Wirtschaftsphilosophie*

- sophie*, Bd. 19, S. 84-103.
- 1927#60. "Über die wirtschaftlichen und sozialen Grundlagen der russischen Getreideausfuhr", *Berichte über Landwirtschaft*, N. F. Bd. 5, S. 393-437.
- #61*. "Die jüdische Kolonisation und die Wirtschaftslage der Juden in Rußland", *Menorah* (Wien), Sep.-Oct.-Nov.
- 1928#62. "Еврейское население под коммунистической властью", *Современные записки* (Париж), № 36, с. 509-531.
- #63. *Die Lehren des Marxismus im Lichte der russischen Revolution*. Verlag Hermann Sack. 90S. [#48の独訳]
- #64. "Das Dorf des russischen Nordens in der Revolution", *Berichte über Landwirtschaft*, N. F. Bd. 7, S. 607-642.
- #65. "Literatur-Anzeiger. M. Krischanowski, Die Planwirtschaftsarbeit in der Sowjetunion, Wien-Berlin", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 60, S. 215-220.
- #66. "Der wirtschaftliche Hintergrund der politischen Krise in Rußland", *Der deutsche Volkswirt*, 16 März, Nr. 24, 1928, S. 777-780.
- #67. [#66]. *Der österreichische Volkswirt*, 17 März, Nr. 25, S. 683-687.
- #68. "Die russische Industrie und die Spezialisten", *Der deutsche Volkswirt*, 29 Juni, Nr. 39, S. 1338-1341.
- #69*. (Salomon Mines) "Die jüdische Landwirtschaft in Bessarabien", *Menorah*, Nr. 3-4.
- #70*. "Berlin Colony of Russian Jews", *Benei-Brith Magazine* (Cincinnati), May.
- #71*. "Colonising the Jews of Russia", *Benei-Brith Magazine* (Cincinnati), August.
- #72*. "Kryzys economiczny w Sowieckiej Rosji i Oprozycja", *Ruch prawniczy, ekonomiczny i sociologiczny*, Kwartal 2, Str. 243-287.
- 1929#73. "Народное хозяйство сов. России, его природа и его судьбы", *Современные записки* (Париж), № 38, с. 401-432; № 39, с. 428-474.
- #74. "Die wirtschaftliche und soziale Lage der Juden in Rußland vor und nach der Revolution", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 61, S. 266-321.
- #75. "Literatur-Anzeiger. N. L. Mecheriakov. The Peasantry and the Revolution, Berlin, 1927; Das Sowjetdorf in Zahlen und Diagrammen 1917 bis 1927, Wien-Berlin, 1928", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 62, S. 652-654.
- #76. "'Getreidefabriken' in Sowjetrußland", *Der deutsche Volkswirt*, 28 März, Nr. 26, S. 853-855.
- #77. "Sowjetrußlands Fünfjahrsplan", *Der deutsche Volkswirt*, 20 September, Nr. 51, S. 1728-1732.
- #78. "Kolonien: Osteuropa", *Jüdisches Lexikon*, Bd. 3, Berlin: Jüdischer Verlag, S. 807-823.
- #79. "Die Sowjetwirtschaft, ihr Wesen und ihre neuere Entwicklung", *De Economist* (Haarlem), Afl. 7/8, blz. 519-544.
- #80*. "Three Jewish Leaders in Russia: Vinaver, Broide and Sternberg. Figures at St. Petersburg before the Revolution", *Benei-Brith Magazine* (Cincinnati), April.
- #81*. "Prawodawstwo ararne Rosji Sowieckiej", *Ruch prawniczy, ekonomiczny i sociologiczny*, Kwartal 1, Str. 77-100.
- 1930#82. "Критика и библиография. Arthur Feiler, Das Experiment des Bolschewismus. Frankfurt, 1929", *Современные записки* (Париж), № 43, с. 523-525.
- #83. "«Пятилетка» и ее исполнение", *Современные записки* (Париж), № 44, 1930, с. 503-520.

- # 84. "Das Ende der russischen Bauernwirtschaft", *Der deutsche Volkswirt*, 21 März, Nr. 25, S. 813-817.
- # 85. "Russische Wirtschaftblüte?", *Der deutsche Volkswirt*, 15 August, Nr. 46, S. 1573-1577.
- # 86. "Die Lage der russischen Arbeiter und Bauern", *Der deutsche Volkswirt*, 22 August, Nr. 47, S. 1608-1610.
- # 87. "Die Agrarpolitik der Sowjetregierung: Schlußwort", *Der deutsche Volkswirt*, 10 Oktober, Nr. 2, S. 50-51.
- # 88. "Das russische Dumping", *Der deutsche Volkswirt*, 24 Oktober, Nr. 4, S. 117-119.
- # 89. "Die Sowjetwirtschaft im Lichte der G. P. U.", *Der deutsche Volkswirt*, 25 Dezember, Nr. 13/14, S. 420-423.
- # 90*. "Der Weltkrieg als ein Wendepunkt im sozialen und wirtschaftlichen Leben des Ostjudentums", *Menorah*, Nr. 11-12, Dezember.
- # 91*. "Collectivisation de l'agriculture paysanne", *La Russie économique et sociale*, Paris, pp. 53-71.
- 1931 # 92. "Критика и библиография. Paul Haensel, Die Wirtschaftspolitik Sowjetrußlands. Tübingen, 1930.", *Современные записки* (Париж), № 46, с. 520-522.
- # 93. "Neuere Bücher über die Sowjetwirtschaft" [Jugow, Die Volkswirtschaft der Sowjetunion und ihre Probleme, Dresden, 1929; F. Pollock, Die planwirtschaftlichen Versuche in der Sowjetunion 1917-1927, Leipzig, 1929; M. Dobb, Russian Economic Development since the Revolution, London, 1928; A. Feiler, Das Experiment des Bolschewismus, Frankfurt, 1929.], *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 65, S. 162-177.
- # 94. "Literatur-Anzeiger. S. Dubrowski, Die Bauernbewegung in der russischen Revolution 1917, Berlin, 1929.", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 65, S. 185-188.
- # 95. "Literatur-Anzeiger. K. Kautsky. Der Bolschewismus in der Sackgasse, Berlin, 1930.", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 66, S. 447-448.
- # 96. "Literatur-Anzeiger. I. Iljin, Welt vor dem Abgrund. Berlin-Steglitz, 1931.", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 66, S. 660-662.
- # 97*. "Die natürlichen Grundlagen und Aussichten der russischen Forstwirtschaft", *Mitteilungen des Reichsforstwirtschaftsrates*, Heft 31, Mai, S. 190-209.
- # 98. "Die Entwicklung der Sowjetwirtschaft zum Vollsozialismus", *De Economist* (Haarlem), Afl. 6, blz. 471-494.
- # 99*. "Forestry in Russia: the Environmental and Economic Factors which Control Russian Forestry", *Skogen* (Stockholm), No. 7-8.
- 1932 # 100. "Судьбы «Пятилетки»", *Современные записки* (Париж), № 48, с. 437-448.
- # 101. "Критика и библиография. А. Югов, Пятилетка. С послесловием Ф. Дана; Iwan Iljin. Welt vor dem Abgrund, Berlin-Steglitz, 1931.", *Современные записки* (Париж), № 48, с. 500-502.
- # 102. *Der Fünfjahresplan und seine Erfüllung*. Leipzig: Deutsche Wissenschaftliche Buchhandlung. 106S.
- # 103. (Brutzkus, W. v. Poletika und A. v. Ugrimoff) *Die Getreidewirtschaft in den Trockengebieten Rußlands. Stand und Aussichten*. Berlin: Verlagsbuchhandlung Paur Parey.
- # 104. "Die Probleme der Kollektivierung der bäuerlichen Landwirtschaft in Sowjetrußland", *Berichte über Landwirtschaft*, N. F. Bd. 16, S. 216-243.
- # 105. "Literature-Anzeiger. A. Ruppin, Soziologie der Juden, Bd. 1: Die soziale Struktur der Juden, Bd. 2: Der Kampf der Juden um ihre Zukunft. Berlin, 1931", *Archiv für Sozial-*

- wissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 68, S. 121-122.
- #106. “Rückbildungen der Sowjet-Planwirtschaft”, *Der deutsche Volkswirt*, 26 Februar, Nr. 22, S. 711-715.
- #107. “Ergebnisse der russischen Agrarsozialisierung”, *Der deutsche Volkswirt*, 27 Mai, Nr. 35, S. 1155-1158.
- 1933#108. “Взлет и распад Советского планового хозяйства”, *Современные записки* (Париж), №51, с. 417-431.
- #109. “Критика и библиография. Gerhard Dobbert. Die rote Wirtschaft, Königsberg-Berlin, 1932.”, *Современные записки* (Париж), №51, с. 474-476.
- #110. “Голод и коллективизация”, *Современные записки* (Париж), №52, с. 415-432.
- #111. “Критика и библиография. Otto Schiller, Die Krise der sozialistischen Landwirtschaft in der Sowjetunion, Berlin, 1933; H. Zörner, Das Agrarexperiment Sowjet-Rußlands, Berlin, 1933; Lancelot Lawton, An Economic History of Soviet Russia, London, 1933.”, *Современные записки* (Париж), №53, с. 465-469.
- #112. “Rußlands Getreideausfuhr. Ihre wirtschaftlichen und sozialen Grundlagen und ihre Ausichten”, *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd. 38, S. 471-504.
- #113. “Rußlands Eisenindustrie”, *Der deutsche Volkswirt*, 16 Juni Nr. 37, S. 1056-1059.
- #114*. “Über die Abstammung der Juden”, *Der Morgen*, April, S. 3-29.
- 1934#115. “Критика и библиография. Michael Hoffmann, Die agrarische Übervölkerung Rußlands. Berlin, 1932.”, *Современные записки* (Париж), №54, с. 476-478.
- #116. “Критика и библиография. С. Н. Пропокович. Идея планирования и итоги пятилетки, с предисловием П. Н. Милюкова. Париж, 1934; Otto Auhagen. Die Bilanz des ersten Fünfjahrplanes der Sowjetwirtschaft. Breslau, 1933.”, *Современные записки* (Париж), №55, с. 440-442.
- #117. “Die historischen Eigentümlichkeiten der wirtschaftlichen und sozialen Entwicklung Rußlands”, *Jahrbücher für Kultur und Geschichte der Slawen*, N. F. Bd. 10, S. 62-99.
- #118. “Die Erfüllung des Fünfjahresplanes in offizieller Darstellung”, *Der deutsche Volkswirt*, 12 Januar, Nr. 15, S. 637-639.
- #119. “Die Wirtschaftslage Sowjetrußlands und der zweite Fünfjahrplan”, *Der deutsche Volkswirt*, 29 März 1934, Nr. 26, S. 1129-1131.
- #120. “Das Problem der sowjetrussischen Planwirtschaft”, *Weltwirtschaftsdämmerung, Festschrift zum 10 jährigen Bestehen des Weltwirtschafts-Instituts der Handels-Hochschule Leipzig*, Stuttgart, S. 35-45.
- #121. “De Uitvoering van het Vijfjarenplan Volgens de officieele Berichtgeving”, *De Economist* (Haarem), Afl. 2, blz. 123-132.
- #122. “Boekbespreking. Gustave Méquet, Les leçons du plan quinquennal. Les questions du temps présent. Paris, 1934”, *De Economist* (Haarlem), Afl. 6, blz. 488-490.
- #123. “Russia’s Grain Exports and their Future”, *Journal of Farm Economics*, Vol. 16(4), pp. 662-679.
- 1935#124. (Б. Бирутский) “Кризис германского сельского хозяйства и национал-социализм”, *Современные записки* (Париж), №57, с. 451-461.
- #125. *Economic Planning in Soviet Russia. With a Forward by F. A. Hayek*, London: George Routledge & Sons. 245p.
- #126. “The Doctrine of Marxism in the Light of the Russian Revolution”, #125, pp. xv-xvii, 1-96. [#63の英訳, 一部省略あり]

- #127. "The Results of Economic Planning in Russia", #125, pp. 97-234.
- #128. "Boekbespreking. Werner Sombart, Deutscher Sozialismus, Berlin, 1934", *De Economist* (Haarlem), Afl. 2, blz. 142-146.
- #129*. 「ロシアにおける「計画経済」実験の結果：権威的学者の調査及批判」, 思想研究所編訳, 58頁。[#127の抄訳]
- 1937#130*. "Über die Grundlagen der Wirtschaft des geplanten jüdischen Staates", *Palaestina* (Wien), Dezember, S. 599-608.
- #131*. *U. R. S. S.: terrain d'expériences économiques*. Paris: Librairie de Médecis, 117p.
- #132. "Plan i rynek w gospodarstwie Rosji Sowjeckiej", *Ekonomista* (Warszawa), Kwartal 4, Str. 46-77. [#146の未発見の完成稿のポーランド訳]
- 1954#133. "The Historical Peculiarities of the Social and Economic Development of Russia", R. Bendix and S. M. Lipset (eds.), *Class, Status and Power*, London: Routledge and Kegan Paul, pp. 517-540. [#117の抄訳]
- 1988#134. *Социалистическое хозяйство* (сост. Д. Штурман и В. Сорокин), Париж: Поиски. (#48と#57を収録)
- 1989#135. "Результаты экономического планирования в России", *Экономика и промышленное строительство*, №10. [#127の部分訳]
- 1990#136. [#44]. *Вестник Ленинградского университета*, Серия 5 (экономика), вып 4 (№26), с. 55-72.
- #137. [#48]. *Новый мир*, №8, с. 174-214.
- #138. [#48] *Вопросы экономики*, №8, с. 131-151; №9, с. 153-158; №10, с. 90-103.
- 1991#139. [#73]. *Вопросы экономики*, №9.
- 1994#140. (сост. Э. Д. Корицкий, А. И. Васюков и Я. З. Захаров) *Экономическое наследие Русского зарубежья XX век: кн. 1. Борис Бруцкус*, Спб.: Комета, 1994. [#48の一部, #73, #83, #110を収録]
- #141. [#28の一部]. Реформа, июль.
- 1995#142. "К теории кооперации", *Вопросы экономики*, №10, с. 124-132. [1937年の草稿]
- #143. *Советская Россия и социализм* (сост. В. И. Каган), Спб.: Звезда, 229с.
- #144. "Советское и крестьянское хозяйство (фрагмент)", #143, с. 9-52. [1929年の未完草稿]
- #145. [#48]. "Доктрины марксизма в свете русской революции", #143, с. 56-111.
- #146. "План и рынок в хозяйстве советской России (фрагмент)", #143, с. 181-204. [1934年以降に書かれた未完草稿]
- #147. "Советская Россия и социализм", #143, с. 205-223. [1937年に書かれた草稿]
- #148. "Результаты экономического планирования в России", #143, с. 112-180. [#127の露訳]
- #149. [#45の一部]. *Новое время*, 1995, №2-3, с. 57-59.
- 1996#150. 「社会主義における経済計算」, 村岡到編『原典社会主義経済計算論争』(『カオスとロゴス』別冊 No. 1), 東京: ログス社, 1996年, pp. 65-98. [#126の抄訳]
- 1999#151. [#62]. Будницкий (1999), с. 293-319.

参考文献

- Boettkt, P. J. (1990) *The Political Economy of Soviet Socialism: The Formative Years, 1918-1928*, Boston: Kluwer Academic Publishers.

- Hayek, F. A. (1935a) "Forward", #125, pp. vii-xii.
- Hayek, F. A. (1935b) *Collective Economic Planning*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Hoff, T. J. B. (1938[1949]) *Economic Calculation in the Socialist Society*, London: Hodge.
- Gassenschmidt, C. (1995) *Jewish Liberal Politics in Tsarist Russia, 1900-1914: The Modernization of Russian Jewry*, London: Macmillan.
- Leggett, G. (1981) *The Cheka: Lenin's Secret Police*, Oxford: Clarendon Press.
- Mises, L. v. (1928) "Neue Schriften zum Problem der sozialistischen Wirtschaftsrechnung", *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 60, S. 189.
- Mises, L. v. (1935[1920]) "Economic Calculation in the Socialist Commonwealth", in Hayek (1935b).
- Mises, L. v. (1981[1922]) *Socialism: An Economic and Sociological Analysis*, Indianapolis: Liberty Classics.
- Norman, T. (1985) *An Outstretched Arm: A History of the Jewish Colonization Association*, London: Routledge & Kegan Paul.
- Pipes, R. (1970) *Struve: Liberal on the Left, 1870-1905*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Pipes, R. (1994) *Russia under the Bolshevik Regime, 1919-1924*, London: Harper Collins.
- Wilhelm, J. H. (1993) "The Soviet Economic Failure: Brutzkus Revisited", *Europe-Asia Studies*, Vol. 45 (2), pp. 343-357.
- Александров, С. А. (сост.) (1998) *Историческая наука российской эмиграции 20-30-х гг. XX века (Хроника)*, М.: Аиро-XX.
- Будницкий, О. В. (сост.) (1999) *Евреи и русская революция: Материалы и исследования*, Москва-Иерусалим: Джойнт.
- Бруцкус, Э. (1995) "Дневник матери-хозяйки", *Знамя*, № 11, с. 181-194.
- Дубровский, С. М. (1922) "Фетишизм частной собственности", *Сельское и лесное хозяйство*, № 7-8, с. 41-67.
- Елисеев, А. С. (1922) "Деятельность XI (Промышленно-Экономического) Отдела Русского Технического Общества", *Экономист* (Пг.), № 1, с. 180-186.
- Емельянов, Ю. Н. (1998) *С. П. Мельгунов. В России и эмиграции*, М.: Эдиториал УРСС.
- Каган, В. К. (1989) *Борис Бруцкус*, Иерусалим.
- Кондратьев, Н. Д. (1993) *Особое Мнение. Избранные произведения в 2-х книгах*, М.: Наука.
- Корицкий, Э. Б., Васюков, А. И. и Захаров, Я. З. (1994) "Экономические воззрения Б. Бруцкуса", #141, с. 3-108.
- Латышев, А. Г. (1996) *Рассекреченный Ленин*, М.: МАРТ.
- Ленин, В. И. (1999) *Неизвестные документы, 1891-1922 гг.* М.: РОССПЕН.
- Рогалина, Н. Л. (1992) "Историк читает Бруцкуса", *Новый мир*, № 12, с. 275-280.
- Рогалина, Н. Л. (1994) "Возвращение Бориса Бруцкуса", *Независимая газета*, 18 октября.
- Рогалина, Н. Л. (1995) "Борис Бруцкус: три опыта строительства большевизма" *Вопросы Экономики*, № 7, с. 122-131.
- Рогалина, Н. Л. (1996a) "В поисках меры (некоторые уроки российских аграрных реформ в XX в.)", *Вопросы Экономики*, № 7, с. 112-121.
- Рогалина, Н. Л. (1996b) "Русский экономический либерализм 10-30-х годов XX в.: История и современность", А. Н. Сахаров (ред.), *Судьбы исторической науки*, М.: Наука.
- Рогалина, Н. Л. (1998) *Борис Бруцкус — историк народного хозяйства России*, М.: Московские учебники.
- Сорокин, В. (1988) "Читая Бруцкуса", #134, с. 86-112.

- Худокормов, А. Г. (ред.) (1994) *История Экономических учений, Часть II* (Межвоенный период), Изд. Московского университета.
- Широкоград, Л. Д. (1990) “О Б. Д. Вруцкусе и его работе «Проблемы народного хозяйства при социалистическом строе»”, *Вестник Ленинградского университета, Серия 5* (экономика), вып. 4 (№ 26), с. 55-72.
- Штурман, Д. и Сорокин, В. (1988) “Предисловие”, #134, с. 5-10.
- Штурман, Д. (1988) “Послесловие”, #134, с. 125-182.
- 小島修一 (Kojima, S.) (1985) “Russische Neo-narodniki in der agrarwirtschaftlichen Forschung: Eine Bibliographie”, 『甲南経済学論集』26巻2号, pp. 69-104.
- 小島修一 (1987) 『ロシア農業思想史の研究』ミネルヴァ書房。
- 小島修一 (1996) 「ボリス・ブルツクス研究覚え書」『甲南経済学論集』37巻1号, pp. 83-97.
- 小島修一 (1997) 「亡命のロシア自由主義経済学」田中眞晴編『自由主義経済思想の比較研究』名古屋大学出版会。
- 中島毅 (1999) 『テクノクラートと革命権力』岩波書店。
- 森岡真史 (1995) 「ブルツクスの社会主義経済論」『立命館国際研究』7巻4号, pp. 38-79.
- 山本勝市 (1939) 『計画経済の根本問題』理想社出版部。

* 本稿は平成10-11年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）による研究成果の一部である。本稿の執筆に際しては、小島修一、Н. К. Фигуровская, И. Л. Рунден, Э. Б. Коритский, А. Г. Фролов, Н. Л. Рогарина, В. К. Каган, J. H. Вилхелмの各氏から貴重なご教示を賜りました。記して感謝致します。